

【第7分科会】

図書館の管理・運営のあり方

～ソフト・ハードの両面からの図書館づくり～

1 発表の要旨

『子どもの「読みたい」を引き出す読書環境づくりを目指して～図書館情報活用能力表と関連させた図書館の管理・運営～』

吉樂佐知子教諭（新潟県魚沼市立須原小学校）

文部科学省が提示した学校図書館の果たす役割のうち「読書センター」としての成果はみられたが、「学習・情報センター」としての機能があまり活かされていなかった現状から、学校独自の「図書館情報活用能力表」と「年間指導計画」を作成し、司書補助職員と連携した環境整備を行って、児童が目的を持って図書館を利用したり、自らすすんで読書に取り組めるように、学校の全職員が意識的に取り組んだ実践レポート。

その一例として、3学年の国語科の「ありの行列」の単元から、一人ずつ自分のお気に入りの昆虫を選び、その昆虫について調べ、その秘密をまとめて、一人一ページを担当し、最後には一冊の図鑑の形にまとめて、学校図書館や地域の公立図書館に寄贈した活動を詳しく紹介。教職員の意識が向上し、教科等で積極的に図書館を利用するようになり、6年児童が全校に向けておすすめの本を展示したりなど自主的に読書を盛り上げる活動が見られるようになった。

課題として、能力表と年間指導計画の見直しと、職員が入れ替わっても読書環境の充実が果たせるようになることが上げられた。

『図書館管理・運営のあり方～読書活動の活性化を図る図書館づくり～』

土屋たまみ司書（長野県小諸市立小諸東中学校）

6年前に異動してきた時は、図書館はあまり使われていない状態だった。棚には日に焼けた本や文庫本が多く並び、貸し出し数も少なかった。読

書カードも記入欄が小さく狭いため、きちんと管理する生徒が少なく返却期限を守るという意識も薄かった。朝読書はあっても自分の好きな本を持ってきて良く、オリエンテーションも新一年生だけ。暇なので委員の当番活動もおろそかになっていた。教科による利用もなく、特別支援学級の生徒は学級文庫を利用し、図書館利用はされていなかった。

そこで、さまざまな改善策を実行した。古い本の買い換え。図書カードの見直し。朝読書での学校図書の利用を徹底。全学年へのオリエンテーションの実施（ルールの確認、『中学時代に読んでおきたい100冊』の説明）。図書委員の当番活動の見直しを図り、読書旬間での活発な活動を計画、実行。学期末には個人読書傾向を作成し、担任に配布。その結果、どの生徒もよく図書館を利用するようになり、貸し出し数もぐんと伸びた。調べ学習でも利用する教科が増えた。また、館内で生徒同士が本に関わる会話をするようになってきた。

課題として、内容が軽い本から卒業できない生徒がいること、朝読書の時間が他の活動に利用される傾向があることが上げられた。

『図書館の管理・運営のあり方～調べる学習の楽しさを知ろう～』

小山敦子司書（長野県上田市立丸子北小学校）

週に一度の読書の時間の充実や、毎月のテーマ展示、ボランティアの読み聞かせもあり、本が好きな児童が多い。しかし、調べ学習については、教科書に出てくる項目について、図鑑や百科事典で調べるといって、毎年同じような固定化されたものになってしまっていた。

昨年度、長野県の“調べる学習モデル地域づくり推進事業”のモデル校になり、東京都荒川区や神奈川県大和市で学校図書館のアドバイザーとし

て活動実績のある藤田利江先生にご来校頂き、低学年、中学年、高学年と三度にわたりご指導を頂いた。その実践レポート。

どの学年も、手法は少しずつ違うが以下の七つのミッションをクリアすることで調べ学習が完成する。「不思議を発見する」「解決方法を考える」「そのままカードを書く」「まとめカードを書く」「テーマを決める」「感想を書く」「まとめを工夫する」

この藤田先生の授業で、児童は「調べることの楽しさ」や「授業に対するやる気」を感じたようだ。そして、どの学年の児童も何か不思議に思ったり、興味のあることを調べに図書館に来るようになった。

課題として、「学習・情報センター」の役割を果たすために、調べ学習に必要な資料を揃えること、教室で児童が何を学んでいるか把握するために教科書を常備し、「図書館利用計画書案」を立てる必要が上げられた。

2 協議内容（質問）

- ・吉樂先生のレポート
「並行読書」について
同作者の作品を読み比べる方法と、教科書に載っている単元について、多くの分類から本を選んで読む方法が紹介された。
- ・土屋先生のレポート
「全学年でのオリエンテーション」について
忙しい中学のカリキュラムで時間をどう確保するか。
「プライバシーの問題」について
ベストリーダーの発表や、担任に個人読書傾向表を配布されているので、どこまで公表してよいものなのか話題になった。
- ・小山先生のレポート
「藤田先生」について
「図書館利用計画書案」は誰が作成するのか。
「児童は外部講師に対してどのような反応をしたか」について

3 指導助言

助言者 下村正人先生

(新潟県魚沼市立堀之内中学校校長)

- ・吉樂先生のレポート
「能力表」を活用すれば教員個人の資質に関わらず、計画的、意図的に指導できて良い。地域図書館と連携しているところも良い。地域とのネットワークが大切である。中学とも連携してはどうか。
- ・土屋先生のレポート
図書館教育系の係会があり、組織として動いているので、発信力や情報力が素晴らしいと推測できる。
読書カードが借りるためのツールではなく、読書記録になっていて、それが三年間大事にされ、最後には本人の手元に残り、ひとつの作品になる。その後の読書生活にも反映されるであろう。読書傾向表は生徒にも示せば、不足している分類の本がわかり、良いのではないか。
- ・小山先生のレポート
学習・情報センターの重要性を理解し、実践できていて素晴らしい。
図書館に、全教科、すべての会社の教科書が揃っていれば、教員の勉強にもなるのではないか。

学校図書館は、司書・本・予算、この三つが揃っていなければ上手くまわらない。学校図書館図書整備等5カ年計画などの情報を校長や行政に提供し、少しでも予算が取れるように司書も一役買ってほしい。

平成19年度に立ち上がった子どもの読書サポーターズ会議でも学校図書館の役割が明記されている。読書・学習・情報センターのほかに、教員のサポート機能、子どもの「居場所」の提供、家庭・地域における読書活動の支援と図書館に求められているものは多岐にわたっている。それぞれが様々なものをヒントにしながら、図書館の運営にあたってほしい。

しかし、図書館の大きな役割はやはり「読書センター」ということだろう。子どもたちが本と出会って、大人になっても本を読み続けていけるようになってもらいたいものです。